

尾西の縞木綿について

～毛織物時代前史～

尾西地方は尾張の西部で昔から絹や麻の織物が織られており、江戸から明治にかけて縞柄の綿織物や絹綿交織物が生産された。綿の種は延暦18年(799)に崑崙人によりもたらされたが栽培に失敗し、その後天文11年(1542)に綿の種が琉球より薩摩に渡来し、全国各地で栽培された。江戸時代には尾張の各地で栽培され、秋になると綿が実りそれを収穫し、又生綿を加工して糸にして、商人等に販売したり、その糸でもって綿織物を生産した。

綿織物が特に発展したのは文化(1804-1818)、文政(1818-1830)期頃で、当時の織物は、明和年間(1764-1772)に棧留縞、天明年間(1781-1789)には寛大寺縞、文政年間には結城縞の織物が織られた。その当時には労働者を雇用して工場で織物を生産し、又出機も利用し、織機は高機が使用された。

生産された織物やつむがれた糸等は商人等により各地に販売されたり、享保12年(1727)より一宮の真清田神社の門前で開かれた三・八市で商人等が仕入れて全国に販売した。生綿、綿糸、縞柄の綿織物も年と共に順調よく発展して来たが、明治24年(1891)の濃尾震災により綿の栽培は出来なくなった。そして織物関連の設備等も被害を受けたが機業家及び地元の人々の努力により回復し、綿糸を商人等より仕入れて、綿織物を生産していたが、明治末頃より毛織物が生産される様になり、大正初期には綿織物より毛織物の生産が多くなり、毛織物の生産へと移行していった。



明治37年～40年頃の絹綿交織物(個人蔵)

- ◆ 棧留縞：室町末期から江戸時代にかけて輸入された舶来品の縞織物の縞柄が原型となった。インド東岸のサントメ港から運ばれてきたのでこの名がある。
- ◆ 寛大寺縞：菅大臣縞のこと。江戸時代、京都の菅大臣町あたりで織られていた織物に由来する縞織物のこと。
- ◆ 結城縞：結城紬の産地、下総の結城で織られていた織物に由来する縞織物のこと。



明治40年～45年頃の綿織物(個人蔵)